

# 中国山地に抱かれた山村の居住習俗

津山正幹

坪郷英彦先生のご退官に当たって、先生からご紹介いただき調査を行った岡山県美作市を初めとして、共に調査を行った中国山地のいくつかの村の調査においてみつけた特徴ある居住習俗を整理してみたい。ここに示した居住習俗は、東日本などとは大きく異なっている事象も多いからである。

それほど険しくない山並みが続く中国山地は、600～1000m前後の山々に囲まれ、十数戸の塊状の集落が標高 200～500mの地に立地した穏やかな地形になっているところが多い。先学者が中国山地は民俗調査にうってつけの地であるとしていたことを、坪郷先生とともに調査をしながら実感する。

## 1 中国山地の建築儀礼 —岡山県美作市後山—

### 1.1 緩斜面に開けた後山の集落

岡山県の北東部に位置する美作市<sup>みまさか</sup>後山<sup>うしろやま</sup>は、岡山県の最高峰で修験道の霊場である後山（標高 1334m）を北東にいただき、その麓に開かれた高原上に点在する集落である。後山の西には、船木山、鍋ヶ谷山、駒の尾山と 1000m級の山々が並び、そこから流れ下る行者川や道仙寺川などがつくり出す扇状地に、集落が立地している。したがって、後山地区の東西約 2.5 km、南北約 1 kmほどの部分のみが、周囲の山間地とは違って等高線が緩んだ緩斜面になっている。集落の標高は 400～550mほどのところで、そこに戸数 138 戸（平成 23 年現在）が建っている。当地が平成 17 年（2005）まで属していた英田郡東粟倉村<sup>あいだぐんひがしあわくらそん</sup>の 7 集落の人口は 1400 人であるが、昭和 30 年代には最も多い人口である 2800 人が暮らしていた。当時は、後山神社の下に映画館があるような賑わいをみせており、かつてはそこが芝居小屋で、祭りのときには芝居興行が行われ、地元の人々の芝居も併せて行っていた。

集落の伝統的な民家を確認したところ、茅葺き屋根の上にトタンを被覆した民家も含めて、後山全体で 20 戸あることがわかった。また、建物の古さではなく、古くからある家の方が、



写真 1 後山の景観

一般に標高の高いところに位置し、分家などで新しく出たような新しい家の方が、標高の低いところに位置している。なお、後山地区の西に隣接する中谷地区には、国の重要文化財の林家住宅が建っている。

当地には、茅を一締めごとに束ねて空き地にまとめて立てたり、大きな樹木に寄せ掛けたりしたカヤグロとよばれるものがある。茅は、屋根材にしたり、農耕用に使ったりするときのために蓄えて置かれているものである。



写真2 カヤグロ

## 1.2 建築儀礼

後山地区には、大工の棟梁として腕を奮っている昭和5年（1930）生まれの西原茂美氏がいる。西原氏は、地元の棟梁のところに弟子入りした。そこで、材を手で削る手斧がけの仕事に身をつけた。その後、兵庫県姫路市の棟梁のところで十年働いた。そこでは機械を使った大工仕事を覚えた。一般に、弟子入りの期間は「千日経ったら一人前」といわれ、三年奉公であった。その後、礼奉公として半年の間、同じ棟梁のところで働いた。その後、西原棟梁は姫路から地元の後山に戻って大工の仕事を行っていた。後山では専ら建屋（住宅）の建築が多い。

建物を建てる時には、まず敷地の四隅に塩をうってから、そこに竹を立てる。竹同士に縄を結びつけて、そこから半紙でつくった御幣を垂らした。竹で囲まれた敷地は、10m四方程度のものから、20m四方をこえるものまでである。中央には台を置き、台には米、塩、酒、するめ、頭つきの魚、野菜を三種類供えた。台の手前には、砂を盛っておいた。その前で神主が祝詞をよみあげ、玉串奉奠たまぐしほうてんを行った。稀に神主ではなく、僧侶が行う場合もある。そして、手前に置かれた砂をまず四方に撒いてから、さらに敷地全体にひろげて撒いた。砂山での鍬入れは、大きな工事などで行うのみで、個人の住宅で行うことはない。

建物の柱の建つ石の上を、松の木で搗いていくことを石搗きとよんでいる。そのときに打ち搗けられる石の置く位置は、大工の棟梁が決めて、それにしたがって石を据えていく。そして石の搗き具合、つまり石の高低をみていくのは、石工の仕事であった。そのときは、墨糸と竹を二つに割った水盛りで測っていった。石搗きの参加者は、講仲間や親類など、30～40人にもなる。松の木の下部につけた竹の輪に紐をつけ、その紐を曳いたり緩めたりして、松の木を石に打ち搗けた。松の木をもって音頭取りをする役目の者が、中央に入って打ち搗ける指示をしていた。そして、伊勢音頭や、盆踊りにも似た石搗き歌を歌い、酒を飲んで勢いをつけながら、順次石搗きを行っていった。

石搗きが済むと、石を搗いていた松の木を施主がかついで、参加者とともに練りまわる。松の木は、ネリ棒と言い換えて、竹の輪のかかった根元の方を施主がかつぎ、石搗きに参加した30～40人の人たちがその後が続いて「ワッショイ、ワッショイ」といいながら、

まずは屋敷のなかを回った。そして、屋敷から外に出て、上手に当たる道を上がり、集落を「ワッショイ、ワッショイ」と声を掛け合いながら練り歩いた。このとき、下手の道を下ってはいけないとされている。回り終えるときには、ネリ棒を道の端に置いてくる。そうすると、ネリ棒を欲しい人が来て、名前をつけていくものであった。

その後、材を組み上げていき、屋根の頂部に入る棟木までを上げてしまう。材を組む仕事が遅れてしまっても、必ず棟木はその日のうちに上げてしまうようにするものである。現在、材の組み立てはユニックといわれる四トン車についたレッカーを利用して行ってしまうが、昭和40年(1965)ころまでは、人力で材を持ち上げ組み立てていった。そのときは、中心に芯棒がついたサンリキという滑車を利用した。サンリキには、三つの滑車がついていて柱を持ち上げるようになっている。こうした仕事は、イカダシとよばれる専門職が中心になって行っており、美作市大原にいたその職人に頼んでいた。地域によっては、こうした仕事を受けもつ人を鳶とよんでいる。

棟木が上がると、棟上げの祝いを行う。棟木近くに、祝いの参加者4~10人ほどが載ることのできるタナ(座)をこしらえて<sup>さじき</sup>棧敷とした。参加者は、全員が紋付き袴姿になって式にのぞんだ。今は2階に座を張って式を行うことが多くなっている。タナには、供え物として、米、酒、塩、餅、野菜三種(大根、ほうれん草、白菜など)、イリボシ(頭がついた小魚)、するめのほか、墨壺、サシガネなどの大工道具も供えられた。さらに、ゴヘイ(御幣)を3本供え、棟札も上げられた。ゴヘイ(御幣)は、施主名、棟梁名、年次などを墨書した材である。かつては竹を利用したが、現在は3cm角で長さ3mほどの材を利用している。ゴヘイには、赤、白、青のほか、黄色のゴヘイアシをつけて色ゴヘイにしている。色のついた障子紙を長く垂らしたり、シュラ(シュロ)を垂らしたりして利用した。なお、ゴヘイの頭には、扇子を丸くし、お多福の面をとりつけた。こうしたゴヘイを3本つくるのである。棟上げの祝いでは、大工の棟梁がゴヘイを振って<sup>たかまがはら</sup>高天ヶ原の清めの祝詞を読み上げた。そして、祝いの参加者は、供え物としていたイリボシを<sup>さかな</sup>肴として、御神酒を飲んだ。その後、棟梁と施主によって、直径10cmほどの大きな四方餅を、建物の四方に一つずつ撒いていった。それが済むと、四方餅に比べると小さいので小餅とよばれる普通の丸餅を、かつては1個ずつ、今は衛生のために2個ずつ袋に入れて、棟上げ祝いの参加者によって建物の前に集まった近所の人たちに向けて撒かれた。小餅は、親類や付き合いの強い家などが持ち寄ったもので、2~3俵、120kgの分量に及ぶこともめずらしくはなかった。そのときはみ



写真3 ゴヘイ(御幣)につけられた扇子とお多福の面

かん箱に小餅を入れて持ってきてくれたもので、箱には持ち寄った人の名前が書かれています。なお、供え餅も撒かれるが、小さい方の供え餅は棟梁が撒き、大きい方の供え餅は施主が撒いた。餅撒きに集まった人たちは餅を取り合って、「ワッショイ、ワッショイ」といながらネル（取り合い）の状態になった。取った餅は、ちぎって分け合うこともある。平成になってからは、子どもが喜ぶようにと駄菓子も撒かれるようになっている。また、一時期みかんも撒かれたが、潰れてしまうこともあるので、今は撒いていない。

ところで、大工の西原茂美棟梁は、先にふれたように修行時代に姫路の棟梁のところで十年働いていた。そのときに知ったことも語ってくれた。姫路では、棟上げの祝いは、満潮のときに行うものであった。したがって、その日の満潮の時間をあらかじめ調べておき、その時間に合わせて棟上げを行った。そして、姫路の西方にあたる岡山県倉敷市水島の仕事では、朝の四時が満潮であったため、その時間に用意しておいた棟木を建物の頂部に組み上げるようなこともあった。さらに次のようなことも語ってくれた。家を建てるときに、棟梁が柱を切り損なってしまった。そこで、女性の髪の毛を繋ぎ合わせて、柱を継ぎ合わせ、完成にこぎつけたとする。こうした話は、全国各地で少しずつ内容を換えながら語られている。

棟上げの式が終わると、骨組みだけの建屋の下で、棟上げの宴を催した。場合によっては、隣の家で宴を開くこともあった。現在では、宴は一ところで1回行っているが、かつては親類の宴と、講仲間の宴との二つを設けて、それを建屋の下と隣の家との二か所でそれぞれ行うこともあった。宴では、棟梁から「メデタ、メデタ、この家の繁盛は、親子の代まで続く」と歌が出る。それに続いて、参加者から相次いで歌が出て盛り上がった。このとき棟梁および大工には、供え物と祝儀が渡される。さらに翌日には、棟上げの式で供えたゴヘイ（御幣）を、施主が御神酒とともに棟梁の家にもって行き、礼を述べた。

なお、建物がすべて出来上がった完成祝いは、屋移りとよばれている。この屋移りは、施主が棟梁、親類とともに祝いをするものであり、棟上げに比べると大きな祝いではなかった。

## 2 笹葺き屋根ともらい風呂 ー兵庫県豊岡市但東町高橋ー

### 2.1 出石川流域に開けた山間地の集落

豊岡市<sup>たんとう</sup>但東町高橋は、兵庫県の北東端に当たる地で、東から南側にかけては京都府に接する。出石川<sup>いずし</sup>が南から北西にかけて流れ、流路沿いに集落が点在している。高橋地区の南端にあたる<sup>こさか</sup>小坂の集落は、出石川の最上流部の集落である。したがって小坂地区は、高橋地区のなかでも標高 250mほどに位置しており、出石川沿岸の集落のなかでは、標高が最も高い。小坂峠を境にして、京都府福知山市<sup>やくの</sup>夜久野町と背中合わせで接している。小坂地区と同様に高橋地区で標高が高いのは、出石川の支流の薬王寺川の上流部に位置する薬王寺の集落で、そこに祀られる<sup>おおいくべひょうす</sup>大生部兵主神社は標高 300mほどに位置する。また、薬王寺の南側に位置する<sup>おおこうち</sup>大河内の集落も標高が高く、300mほどのところに立地する。大河内は、



かつての京街道といわれた出石・福知山道が通り、街道は当地から南下して登尾峠をこえると京都府福知山市上佐々木にいたる。小坂から出石川を下ると、京街道（出石・福知山道）の宿場町として高橋地区では最も賑わった久畑くぼたの集落（標高 150m）にあたる。久畑は、宿場の町並みを今に残している。ここは、街道を挟んで民家が近接して立ち並んでいる。そうした場合は、アマタレ（雨垂れ）とよんでいる屋根から落ちた雨の滴しずく（アマタレシズク）によって地面が掘り窪められた部分が、隣家との境になっている。したがって、門や塀などはみられない。

高橋地区の集落のほとんどは、出石川と薬王寺川の流路沿いにみられるものである。平地もこれらの河川がつくったかつての氾濫原にあるのみできわめて少なく、そこに水田などが耕されている。そのほかは、山間地帯である。

## 2.2 笹を使った屋根材

民家の屋根は、かつては草葺き屋根であったが、調査時点（平成 25 年）ではその上にトタンを被覆している民家か、または瓦葺きに葺き替えている民家かのどちらかであった。草葺きは、ワラ屋根とよばれているが、笹で葺かれている。そして屋根材の笹は、カヤと呼ばれている。つまり、ワラ屋根とはいっても、稲藁や麦藁で葺いているわけではなく、カヤといっても一般的なカヤではなく、笹をさしている。ただし、笹のみで葺いているわけではなく、屋根下地に近い底面部分には、ススキかオガラ（麻殻）を敷いている。その上に笹を載せて葺いていく。笹の屋根は腐りにくく、各家では一代につき 1 回葺き替える程度、つまり 30 年ほどの耐久性をもっている。なお、ススキの直径は鉛筆程度の太さで背は高くはならないが、笹はススキより太い。屋根葺きは、屋根屋とよばれる屋根葺き職人が中心となって仕事をするものの、その手伝いとして地区の人が総出で仕事を手伝う。各地区にはかつて屋根屋がいて、平田地区では 3 人もの屋根葺き職人が住んでいた。葺き替えのためには、笹を山奥から刈り取ってあらかじめ用意しておく必要があった。さらに無尽ガヤといって、屋根葺きのための屋根材を融通しあう組をつくって、笹を家ごとに貸し借りするようなこともあった。平田地区では、1 貫（4 束）使うと、2 貫（8 束）返ししておく無尽ガヤで、屋根材の笹をまかなっていた。なお、屋根材の笹（笹は牛の飼料にも利用）のほか、クズバ（葛葉）といわれる牛の飼料や縄ないのための藁などは、土間の上に淡竹はちくを編んで簀の子状にしたものをつくり、その上に乾燥させながら蓄えて置かれた。



写真 4 点在する民家（小坂地区）

## 2.3 内廐形式の民家

屋根と居室との間の小屋裏（屋根裏）は、タカまたはコヤバとよ

ばれ、梁の上に屋根が架かった三角の部分にあたる。タカには、古くなった神札をくくりつけて置かれている。主屋の屋内の土間はニワとよばれるほか、土間が表から裏までとおり表にも裏にも出入口がついているためトオリマなどともよばれている。右勝手型の民家の場合、右側に土間がつき居室が左側についているが、左勝手型の民家の場合はその逆で、左側に土間がつき居室が右側についていて、どちらの型の民家も当地にはみられる。土間には、出入口近くに風呂場がつき、壁を隔てた屋外に小便所がついていた。土間では、稲を収穫してから行う稲こきを行った。また、冬期間に縄をなったり、草履や俵（ぞうり）などをつくったりする藁仕事も、土間が作業場になる。そのため、藁を叩いて加工するための藁打ち石も、土間に置かれていた。土間の裏手には流しがつき、味噌小屋や物置も裏手にあった。クドとよばれる（かまど）竈は、裏手の居室側に二口しつらえて御飯を炊いていた。ただし、出石川の最上流部に位置する小坂地区では、御飯はクドで炊くのではなく、御飯は炉でつくられニルとよばれていた。当地では、小坂地区以外でも炉で御飯をつくっていた地域がみられた。

そして、土間の下手の表側には、マヤとよばれる厩が仕切られてついていた。つまり、内厩形式の民家であった。厩は1間半四方ほどの大きさのもので、土間側にカンノキとよばれる4、5本の横棒を渡して、そこから出入りをしたり、馬や牛が顔を出したりしていた。なお、マヤは、古くは馬の飼育場所であったが、その後牛の飼育場所へと変化していった。その牛も昭和40年代までの飼育であった。なお、マヤと風呂場、そして壁を隔てた小便所とは接して置かれているが、これらの使い終えた湯や糞尿は、一か所にまとめられて後に肥料として利用された。マヤでは、動物を飼育するため（はえ）蠅が発生してしまう。特にマヤは屋内にあるので、蠅の発生を防ぐ必要がある。そのためには、ムロノキを石油缶に入れて焼くと、煙が大量に出て、蠅退治に役立った。

嫁入りのときは、かつてはベタ車といわれる車で嫁入り道具を馬が曳いて運んで入家したことがあったようである。嫁は土間の出入口から入り、嫁入りを見にきた子どもたちには、煎餅などが与えられた。一方、葬式のときの棺は、土間の出入口から家の

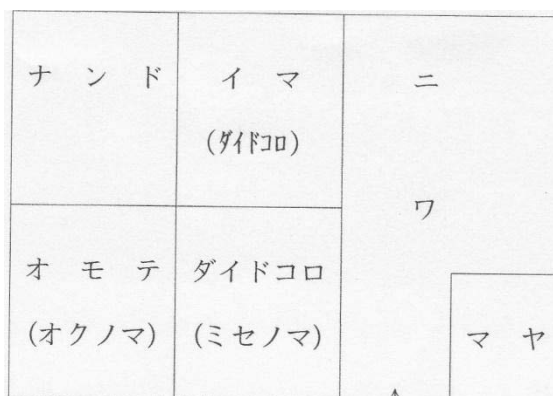


図1 右勝手・田の字型の民家

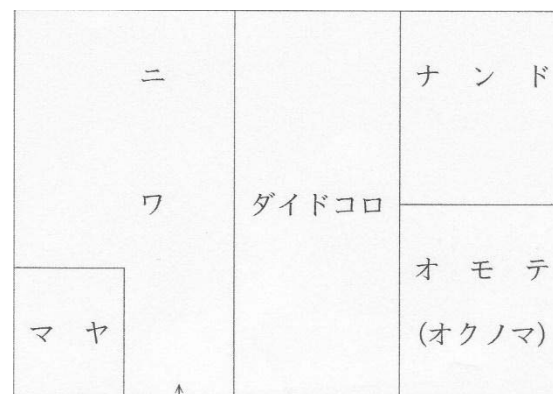


図2 左勝手・広間型の民家

外に出した。しかし、現在では棺をオモテの座敷から直接屋外に出すように変化している。このとき、禅宗を信仰している家では、茶碗を割ることも行われている。なお、当地では、死者の魂は忌中まで屋根の棟にいると考えられている。

居室は、田の字型四室に分かれているものと、下手の居室に間仕切りがなく一室になり、上手が二室に別れた広間型のものがある。土間寄り付きの下手の居室の名称は、広間型の場合はダイドコロとよばれていたが、そこに間仕切りをしつらえて四間取りの田の字型になると、間仕切りされた表側の居室をダイドコロという場合と、裏側の居室をダイドコロという場合がある。表側をダイドコロという家では裏側をイマとよぶ。一方、裏側をダイドコロという家では、表側をミセノマなどとよんでいる。なお、下手の居室の裏側には、炉がしつらえられていた。そして、表側には、三尺幅の縁がつくられており、縁の下には鶏を飼っていた。

上手側の居室は、2室に分かれている。2室のうち、表側の居室はオモテとかオクノマとよばれている。そして、表側の居室には床の間をしつらえている。仏壇も置かれている場合が多い。上手裏側の居室は、ナンドとよばれている。ナンドでは、出産後の女性が7日間閉じこもっていた（小坂地区）。そのときの食事は、姑が運んでくれていた。7日目には、産婆さんにもきてもらい、嫁はナンドからようやく表側のオモテの居室に出てこられた。

当地では、民家の建て替えの時などに出る部材は、競りにかけて売られていた。古い部材の再利用をはかっていたのである。また当地では、養蚕を大正の初め頃から盛んに行ってきた時期があるが、そのときは居室のうちダイドコロとナンド以外はすべての居室が、2階とともに養蚕に利用された。

炉は、ユルイまたはイロリとよばれる3尺四方からやや長形の大きさのもので、土間寄り付きの居室の裏手に置かれていた。炉の周囲の木枠は、硬い材の桜の木を利用したもので、ユルイブチとよばれている。さらに、その内側の周囲には、桜の木のゲス板をしつらえていた。炉の周囲には、座名がついており、そこに座る人も決まっていた。奥にあたる上手側はヨコザとよばれて家の主人が座る。その向いの土間寄りの下手の座はキジリとよばれて嫁が座って薪をくべる場所であった。出入口に近い表側の座はタテザとよばれ客人が座る。その向いはナベザとよばれる主人の妻が座る場所であった。このような座名のなかでも、ヨコザという座名は全国にみられる一般的な座名であるが、そのヨコザに対応するがごとくに、タテザという座名がみられるのは地域性があらわれている。なお、炉の中央には、サントクとよばれるいわゆる五徳を置き、そこに鍋をかけて味噌汁などをつくっていた。したがって、自在鉤は吊るしていない。炉の中には足を入れることはせず、もし足を入れることがあれば叱られた。炉は昭和40年代になると、掘りコタツに代えられていき、そうなる足を入れられるようになった。

## 2.4 もらい風呂と居住習俗

風呂は、土間の出入口に近い屋内のマヤ（厩）の壁脇に風呂桶をしつらえて、そこを風

呂場とよんでいた。このように各家で風呂はもっていたが、風呂を沸かす家は、近隣の2、3軒で順繰りに沸かしていた。近隣の人は、風呂を沸かした家の風呂に入りに行くもらい風呂の習俗がみられたのである。なお、当地には、リンボ（隣保）といわれる班があるが、これは10軒程度で組になっているもので、もらい風呂の範囲よりも広い。風呂に入る順番は、ほぼ決まっていた。最初に風呂に入るのは、風呂を沸かした家の主人である。次は、近所の主人が入り、その次には近所の家の女性が入る。そして、最後には沸かした家の女性が入るといようになり、併せて20人ほどが一つの風呂に入っていた。風呂は火を焚きながら、湯が足りなくなると足し湯をして湯を補っていた。もらい風呂は、風呂を沸かした家が近隣の家に、「ワイタデー、キナショ」「アイタデー、キナショ」と声を掛けてまわった。こうしたモライ風呂は、昭和40年代半ばまで行われていた。このように、一つの風呂桶で家人のみならず近隣の人も含めて何人もの人が入るため、残り湯は肥えた湯とでもいえるものになる。その湯はタメに蓄えられて、麦畑などに入れる肥料として有効利用されていた。なお、風呂桶は、木製の五右衛門風呂を利用していたが、その後、鉄砲風呂とよばれるカネ製の風呂に代わった。風呂のなかの桶の下にはゲス板が敷かれて、そこに足を載せていた。

当地は、浄土真宗を信仰している家が多い。全国の浄土真宗信仰地域においては、古くは神棚の設置がなかったところもあったが、その後神棚の設置がみられるようになっていく。しかし、当地では、神棚をしつらえていない民家が、いまだにみられる。神棚のない家では、神棚に近い存在として、オトコサマとかトコサンなどとよばれている床の間がある。上手のオモテとよばれる居室にある床の間には、掛け軸を掛け、神社から受けてきた御札を箱に入れて置かれている。正月には、鏡餅を供え、松を生けている。床の間の民家への出現は、古いことではなく、元々床の間は民家にあるものではなかった。しかし、神棚の設置をしていない当地では、床の間が神棚に代わる機能をもってしまった可能性がある。一方、禅宗を信仰している家も当地にはあり、こうした家では元々神棚はしつらえて祀られている。

### 3 山を駆け巡る炭焼きの家族 — 島根県益田市匹見町三葛 —

#### 3.1 山の恵み

広島県と山口県の県境に接した島根県の南西部に位置する島根県益田市<sup>ひきみ</sup>匹見町は、町域のすべてが中国山地のなかにあり、町域の96%が山林である。益田駅からは約40km、広島駅からは車で高速道路を使っても約2時間かかる匹見町の旧役場のあったところから、さらに約10km山に入ったところに戸数約30戸の<sup>みかづら</sup>三葛の集落がある。三葛の山の恵みは数知れない。山の溪流地の冷水は、当地にわさび田をもたらした。わさびの品質の良さは、匹見わさびとして京阪神にも声価を高めた。わさびを井の底にいれるうずめ飯は、<sup>いわみ</sup>石見地方の特産品でもある。山に棲む動物では、まぼろしの魚といわれるゴギが捕れる。イノシシは畑を荒らすので周囲にトタンやネットを張りめぐらせなければならないものの、猪汁



として美味である。熊も第二次世界大戦前までは食用にしていた。今でも体長2mほどの熊が人家の近くに出没することがある。ウサギやタヌキ、ムジナ、キジなども棲んでいるが、捕ることはあまりなかった。しかし、テンやイタチは捕って毛皮を売っていた。三葛には、猟師はかなりいたが、一人いるのみになっている。

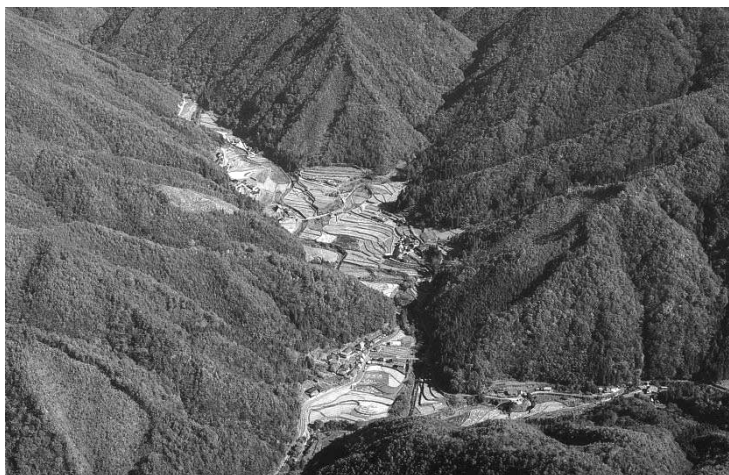


写真5 山に囲まれた三葛（『匹見町町勢要覧』）

そしてもっとも恵まれている山の恵みは、森林である。こうした山深い地では、杉やブナ、ナラ、トチ、ケヤキなどが繁り、山を生業の糧にする人々にとっては、絶好の地でもある。三葛の山に入った人たちのなかには、広島県戸河内町<sup>とごうち</sup>などから来て碗や盆を作っていたドウマンシとよばれる木地師が数組いた。藤木や堀兔<sup>ほりう</sup>を名のった木地師たちである。彼らは大正期頃から山に小屋を作って住み、山を点々と移動して仕事を行いながら生活をしていた。また、山奥に入り小屋を作って生活しながらシイタケの栽培を行っていた人もいた。この人たちは、大分県から来た板井や吉田と名のる人であった。そのほか、山の木を伐採した後に行うキザシの仕事をするために入ってきた人もいた。キザシとは、ソリで材木をおろすキンマヒキのことである。この人たちは、四国や九州から来た人たちで、山に飯場を作って生活をしていた。また、昭和30年代には、通称かいさんとよばれる独り者が三葛周辺の山々を点々としていた。かいさんは、山に小屋を建てて住み、藁草履<sup>わらぞうり</sup>を作って稼いでいたほか、村人に頼まれて木をおろす仕事などをしていた。村人は、かいさんを風呂に入れ、米や酒を渡していた。

第二次世界大戦後まもない昭和22年（1947）には、奈良県吉野に本社のある大七という会社が町有林を購入して山林の伐採を始めた。三葛の東約3kmの山に飯場を作り、50～60人もの従業員が寝泊まりしていた。三葛の地は、匹見町の中心部までの道路が今でも細い道だが、当時すでに杉丸太を満載した大七のトラックが、町との間を日に三回往復していた。三葛の集落も、大七が入ってからは静かな山村から一転して都市的な町に変わった。スマートボール・パチンコ店のほか、酒屋・食料品店・煙草屋・雑貨屋が出来た。酒屋ではコップ酒を出して飲み屋にもなった。匹見町の中心部には映画館があったので、夜になると大七のトラックに人を載せて従業員ならずとも三葛の人たちも映画を見に行くようになった。しかし、こうした状態は長くは続かなかった。大七が三葛の地にいたのは、昭和29年（1954）までで、10年にも満たなかったのである。その後、三葛にはほかの会社が

入ったがそれも長続きはしなかった。そして三葛の村は、一時の賑わいは消えて、また元の静かな山村に戻っていった。

### 3.2 山々を移動する炭焼きの家族

炭焼きを生業とした人たちが三葛の山に入ってきたのは、兵庫県から大正 10 年 (1921) の頃に来た通称角さんとよばれる人であった。炭焼きの人たちは、堂国、藤田、上道などの姓を名のっていた。そのなかの藤田姓を名のる人たちは、藤田一蔵が福井県から率いて来た七家族である。七家族とは、一蔵の家族のほか、一蔵の義理の弟一家、一蔵の義理の弟の嫁の親類が三組、一蔵の妻の叔父一家、そして一蔵の妹の義弟一家であった。この家族の一員に、三葛に在住する斎藤かる子さんがいる。かる子さんは、福井県の橋立 (福井県南条郡南越前町橋立) で大正 9 年 (1920) に生まれた。福井県を家族とともに離れたのは、昭和 2 年 (1927) のことである。その後、炭焼きを行いながら各地の山々を点々とした。そして匹見町に入ったのは、昭和 4 年 (1929) 頃のことであった。匹見町で初めて入った山は、三葛よりも北にある檜田地区の山である。そこには 3 年近く住んだ。その後南下して元の三葛小学校近くの山に三年近く入った。その後さらに南下して三葛の正円寺上手の山に 3 年近く入ることとなるが、そこであるかる子さんは満 16 歳を迎えたときに、地元三葛の斎藤家に嫁ぐ。この時点であるかる子さんは、炭焼きをしていた家族から離れることになる。一方、福井から来た家族は、三葛の集落よりも南東に約 3 km 行った現在の主要地方道六日市匹見線に隣接する町内最南端の地に移る。現在そこはわさび田になっている。この山には 8 年近く住み、昭和 20 年 (1945) にはさらに小川崎地区の山に移った。藤田一蔵率いる 7 家族は、それぞれの家族ごとに山に小屋を作っていた。かる子さんの山に住んでいた頃の家族は、両親のほかにも子どもが男 2 人と女 2 人の 6 人家族であった。その後、長男は結婚して住まいを代えるが、山で炭焼きを続け、長男のところにも子どもが四人生まれた。

藤田一族の作る炭は、黒炭であった。同じ炭焼きでも石川県から来て三葛周辺の山で生活していた 2 家族は、黒炭ではなく白炭を作っていた。そのほかにも三葛周辺の山で小屋を作り家族とともに生活をしてきた炭焼きの人たちもいる。これらの炭焼きを生業にする人たちは、他県からそれも遠く離れた地から来た人たちであった。そして家族をつれ、親類を引き連れて三葛の山に入ったのである。こうして集まってくるもっとも大きな理由は、炭焼きに利用するナラの木の材質が良かったことである。炭を購入してくれる炭焼きの親方は、炭ができると馬車で炭を取りに来た。同様に食料品を山に運んでくれるのも、この親方であった。山に入った炭焼きの人たちは、まず立木を山師 (コビキ) から購入して炭焼きを行う。そして炭を売って資本ができると、山を買ってさらに炭を焼いていったのである。炭焼きの収入は、けっして悪いものではなかった。その一端をうかがわせるものに昭和 10 年代の初めに斎藤かる子さんの嫁いだ先への持参品にみてとれる。持参品は、箆筒、布団、鏡具、縄ない器、<sup>もみす</sup> 器のほかにも田圃が七畝分あった。つまり、山の小屋に住むことは住みやすい環境ではなかったと思われるが、この持参品からは単なる山小屋生

活を想像することができないほど、炭焼きの収入の良さが理解できる。

炭焼きの家族は、大人ばかりではなく子どももいる。山に小屋を建てて生活をするが、子どもは学校に通わせる必要があったので、就学年齢の子どもがいる家族は、あまり山奥には入らず、子どもが学校に通える程度の山に小屋を建てて住むことになる。炭焼きの人たちは、3年程度で山を移っていた。したがって三葛に入った炭焼きの人たちは、そう長く当地にいたわけではない。藤田一族7家族のうち、残ったのは1家族のみであった。また、石川県から来た2家族も当地を離れた。いい炭焼きのできる山に移って行ったり、故郷に戻ったりしたのである。山々を渡り歩くのが、炭焼きの宿命でもあったといえる。こうした炭焼きの生活は、昭和30年(1955)頃まで続いていた。このように三葛の山には、炭焼きや木地師をはじめとして山に生業の糧を得ている人たちが、入れ替わり立ち替わり入り込んでいる様子がわかる。三葛の人は、それを「山が豊富だから」といって説明する。これは山が多いということではなく、山の恵みが豊富だからという意味であろう。そして、山の恵みは、三葛に元々住む人だけのものではないという意識があるかのように、他地域の人を受け入れている様子も伝わってくる。

ところで炭焼きを生業にする人が家族を伴って山を点々と移動している様子は、日本各地を定住せずに移動していたサンカを連想させるが、三角寛『サンカ社会の研究』や田中勝也『サンカ研究』には、炭焼きを生業とするサンカはいない。また、三葛でも「サンカ」の名称を聞くことはできなかった。

### 3.3 ヒバタとよばれる炉の習俗

三葛地区には、明治38年(1905)生まれの渡辺ハルノさんが健在であった。ハルノさんから屋内の火所である炉の話を知ることができた。ハルノさんによると炉はヒバタとよばれている。大きさは3尺×4尺半程度のもので、その上には障子1枚程度の大きさのアマダとよばれる火棚を置き、カネ製の鉤を吊るしていた。炉の縁はロエンとよばれ、松の木が利用された。御飯は、鉤に鍋を吊るして炉で作った。こうして御飯を作ることを「御飯をニル」とよんでいた。鍋は、1升、1升半、2升、5升などがあり、家族の人数や寄り合いで人の集まる人数によって鍋を使い分けた。炉で餅をつくる時には、五升の鍋に水を入れ、その上にコシキとよばれる丸い桶を載せた。コシキの底には箸を下に引き、皿を載せてから糯米を入れて蒸かした。しかし、戦争の折に鍋を供出することになった頃から、竈をつくる家が三葛にもあらわれ始めた。それに伴って唯一の火所であった炉は廃れていき、竈へと煮炊きが移っていったのである。当地でクズとよばれている竈は、最初は五升鍋をかけて利用したが、その後は羽釜をかけるようになっていった。そして竈を使って御飯を作るようになってからは、「御飯をたく」というように表現が変わっていった。餅を作るにしても、糯米を蒸籠で蒸かして作るようになっていく。

火付けの木はシデとよばれ、ナラやトリンボの木を利用した。オキにして炉のなかの灰をかけてくすぶらせておいた。火をつけるときは、小さく割ったマキにこの火をつけるのである。マキにはサクラなどの木を利用した。木を山から降ろしてくるのには、トッカン

とよばれる輪を木に挿して雪の上を引いてくる。その後、トツカンで降ろしてくるのをやめて、ソリに載せて降ろしてくるようになった。降ろしてきた木は、ヤジリとよばれる軒下においた。こうしたマキを積んで置くところは、キグロとよばれている。このキグロをみて「キハンマイ」という言葉を使うことがある。キハンマイとは、「木がないくらいなら米はない」という意味である。

古くからあった炉には、火の神がいるといわれている。したがって炉にきたないものを捨てると罰が当たるといわれる。また、1月には藁で作った馬に、炉に吊るした鍋の墨をつけた。墨のついた藁馬をトイトイといって人の家に入れてくる習俗もある。また、炉の周囲には座名があり、座る人がほぼ決まっていた。出入り口から一番遠い座は、ヨコザといって主人が座る。ヨコザの裏手脇の座はワテザとよんで主婦の座る座であった。ワテザの向かえはオキテとよばれる座で、客人の座るところである。そしてヨコザの向かいのもっとも出入口に近い座は、キジリとよばれる嫁の座となっていた。

#### **[参考文献]**

矢富熊一郎、1966『匹見町の民俗』匹見町

市原輝土ほか、1962『西石見の民俗』吉川弘文館

宮本常一、1976『中国山地民俗探訪録』（宮本常一著作集 23）未来社

岡山県英田郡東栗倉村編、1979『東栗倉村史』東栗倉村

古々路の会編、2002、2013、2015『昔風と當世風』82号、97号、99号、

所属：一般社団法人日本民俗建築学会（幹事長）

E-mail アドレス：m-tsuyama@nifty.com